

# 山岳部

設立	1939年12月
部長	神原 陽一(物理情報工学科)
現在の部員数	14人(2013年4月現在)
OB/OG 会代表者	日比谷 孟俊
OB/OG 会会員数	176人
部誌	嘯雲 1~6号
URL	<a href="http://www.kstac.jp/">http://www.kstac.jp/</a>

山岳部は藤原工業大学予科がスタートするのと、ほぼ時を同じくしてできた部である(1939年12月)。途中、戦争があり、日吉の校舎は空襲で焼失、目黒、溝の口、登戸、志木などを転々とし、山登りどころではなかった。1949年に小金井に安住の地を得て、大学山岳部らしくなる。1953年にはエベレストが初登頂され、1956年に日本隊がマナスルに初登頂し、山岳部の部員数が増える。矢上移転の頃から部員数が減り始める。力をつけた山岳部はインドヒマラヤ・キャシードラルに遠征し(1983年)、日本山岳会のマッキンリー気象観測プロジェクトでは、主要な役割を果たす(1994~1996年)。ここ10年程度は部員数の減少に悩んだが、環境を前面に取り上げた創生プロジェクトにより、部員数が増えてきている。

## 創部と戦争の頃

山岳部の発足は山岳部誌『嘯雲1号』の記載によれば、1939年9月に1期生の政所、山本、富所らが山岳部を作りたいと申し出たことに端を発



藤原工業大学山岳部誌

する。開校早々のことで運動部に関して決まりもなかったので、ドイツ語の金原三郎を会長に、普通部の教員であり藤原工業大学予科の体操の教員を兼担していた酒井将を副会長に仰ぎ、藤原工業大学山岳スキー同好会として1939年12月7日に結成され、12月20日に東横百貨店内の東横グリルで発会式が行われた。藤原工大として最も古い部の一つである。12月20日という日付は、5期応化の馬場英雄が保管していた資料の中にあった。その手書資料は、三田の図書館がデザインされた慶應義塾のノートを利用した「藤原工業大学山岳部誌」(写真)、原稿用紙に書かれた山行記録、1949年12月の南アルプス夜叉神峠での松広新講師遭難記録などであった。部の運営方法については、鈴木登紀男が体育会山岳部の山田二郎(のちに1960年ヒマルチュリ遠征隊長)に相談をした。

既に1937年には日中戦争が本格化し、1939年9月にはドイツ軍のポーランド侵攻により第二次世界大戦が始まった時期であるが、第1回記念祭逍遥歌「惜春の譜」(1期生永井隆作詞、同山本徹(山岳部、野球部)ら作曲)に象徴されるような、旧制高校的な青春謳歌の雰囲気も保たれていたことが、『予科誌創刊号』からは読みとれる。

山岳部発足直後の1939年12月には、岩原でスキー合宿が行われた。1期生鈴木登紀男のアルバムからは、山行は北アルプス槍穂、白馬、南アルプス塩見岳、北岳、御嶽、中央アルプス、八ヶ岳、奥秩父、谷川岳に及んだことが分かる。

写真は1940年12月の妙高赤倉でのスキー合宿の様子である。合宿は赤倉にあった藤原銀次郎理事長の別荘を拠点として行われた。この別荘の跡地に現在は旅館赤倉荘がある。



赤倉でのスキー合宿 1940年12月

1943年秋には大学生の徴兵猶予が停止され、文系学生は入営し戦地へ赴くこととなった。理工系の学生は入営を免除されたものの、藤原工大の学生の場合は豊橋、さらに多賀城の海軍工廠での勤労奉仕に励むこととなった。そのような状況でも卒業論文を作成、そして卒業を控える中、積極的に山行が続けられた。藤原工業大学は、第1期生を送り出すと同時に慶應義塾大学工学部となる。

その後、1945年4月15日から16日払暁にかけての空襲で日吉校舎は焼失、これに続いて工学部は福井、目黒、溝の口、登戸、志木、小金井へと移転を目まぐるしく繰り返し、組織的な山行ができなくなっていった。1949年に工学部は、漸く小金井に安住の地を見出し、戦禍からの復興が始まることとなる。1949年12月に、4期松広新講師が南アルプス夜叉神峠で遭難死した。この時の克明な救援記録が新発見の資料にある。

### 小金井時代

慶應義塾大学藤原記念工学部として小金井に移転。世相はなお戦後の困窮の中にあっただが、山行を続けていった。一方、山岳界全体で見ると、1953年にエベレストの初登頂、1956年には塾出身の榎有恒を隊長とする日本隊によってマナスルが登頂された。1960年には体育会山岳部によりヒマルチュリが初登頂され、工学部出身で体育会山岳部に在籍の大森弘一郎が参加した。大学山岳部の活動が頂点に達した時期である。

工学部山岳部は設立の当初は、近代アルピニズムを目指していたが、戦争の影響や松広の遭難死



千丈沢合宿 槍ヶ岳北鎌尾根 1957年

もあり、活動は低迷していた。また、当時の工学部では1年の教養課程を日吉で過ごすため、部活動は小金井に移ってから始めるのが通例であり、実際の活動期間が短いという制約があった。

このような状況の中、15期応化鈴木斐雄、16期電気日野正紀により、いわゆる大学山岳部的な活動を目指そうという機運が高まり、リーダー陣の養成や新入部員の訓練に積極的に取り組んだ。試行錯誤の結果、秩序だった山行や合宿計画を重ね、冬山にも活動範囲を拡げて行き、少しずつ大学山岳部としての形態が整っていくこととなった。また、この頃は体育会山岳部との交流も盛んに行われ、相互の合宿への参加や部室への相互訪問なども行われていた。1954年の富士山での雪崩による医学部山岳部遭難事故を契機として、学生の登山を指導するOB会組織が作られた。



北アルプス縦走への出発 1959年



極地法による横尾尾根での春合宿 1962年

この頃の部室は、13期電気の浅川朗が中心となって、ボイラー室を改修して使用していた。寝袋、炭俵、列車の行先表示板多数、はては地藏菩薩数体までが雑多に散在していたが、それなりに居心地の良い場であった。19期の頃に学生ホールが新しく建てられ移動した。「部室」を表す「ルーム」という言葉は単に部屋を意味するものではなく、考え方や文化も含めた「山岳部」そのものを表す言葉として愛着を持って現在まで使われ続けられている。また当時は山における活動だけでなく、山の歌を中心とした歌唱も盛んで、原語によるコーラスで記念祭に積極的に参加していたことが、卒業アルバムなどからうかがえる。

20期清水真佐男は1年生から入部した最初であったが、多くの場合には2年生から部活動を始めていた。しかし、それには自ずと限界があり、日吉の1年生を勧誘することが図られ、ついに1961年から1年生の入部が実現した。それ以降毎年数名ずつの入部が継続することとなった。またこの頃は各学年別の部員数も多く、かつ、高校時代に山行や山岳部生活を経験した者もあったため、活動の幅を広げていくことが可能となった。

毎年、年間の目標が定められ、その目的のために年間を通じた合宿計画が立てられ、各合宿前には毎回OBとの検討会が実施されて議論をし、指導を受けた。こうした機会や部員相互の議論を通じてLeadership、Membershipを身につけていくことができた。部員数が増加したことによりテント等の隊用装備の拡充、補充も必要となった。その資金確保のために、13期浅川朗のアイデアで夏休

みには、小金井校舎敷地内の防火用水池の「掻掘り」や、近所の苗木畑の手伝いを行った。

大学山岳部としての行動様式の確立の結果の一つとして、夏の定着合宿の地は北鎌尾根千丈沢や剣沢から、自ら開発した横尾尾根右俣にも及び、更に充実した合宿を運営できるようになった。大人数の大学山岳部としての活動の集大成として1962年の春山合宿は極地法により北ア横尾尾根で行われ(写真)、成功を収めた。

その後も4年制の部員構成の下で活発な山岳部活動が展開されていった。夏の剣岳北方稜線や日高山脈での藪こぎによる縦走(表参照)、積雪期の北アルプス鏡平から薬師岳への縦走(1967年)など、岩登りや積雪期を含む活動も盛んになった。しかし、1967年11月に甲斐駒ヶ岳尾白川で吉田裕(管理1年)、1972年3月には鹿島槍ヶ岳赤岩尾根で細田勇吉(電気4年)と、二度にわたって遭難事故を起こすこととなったのは痛恨の極みであった。OB会を含めた山岳部全体の反省と議論がなされた。そして改めてLeadershipとMembershipの重要性が確認され、部の行動規範として現在に引き継がれている。Leadershipとは単に上位者が下位にあるものを命令して動かすことではない。Membershipとは、下位の者が上位者の命令に単に従うことではない。したがって、CommandershipやFollowershipとも異なる。Memberは独立した個人であらねばならない。悪天候に遭遇したとき、あるいは径を失ったときなど、誰もが自分の意見を述べる必要がある。議論を尽し納得を得たのちにLeaderの指示に従う。これが真のLeadershipでありMembershipである。リベラルであることが基本である。



前穂IV峰の岩登り 瀬上、山本 1970年

## 遙かなる高みへの挑戦（日高、知床、剣北方稜線）

	年	月日	山城	人数	コースなど
日高山脈	1953	8.16～28	日高北部	4	八千代、トッタベツ川、三股、七つ沼カール、幌尻岳、新冠川両股、エサオマントッタベツ岳、カムエク岳、札内川、上札内。
	1964	8.10～22	日高北部	4	トッタベツ川、三股、戸蔭別岳、七つ沼カール、幌尻岳、新冠川両股、エサオマントッタベツ岳、カムエク岳、札内川。
	1966	8.7～18	日高南部	4	静内、コイボク本流、名無沢、1720m峰、1839m峰、ヤオロマップ岳、コイカクシュサツナイ岳、奥二俣、上札内。
	1975	8.9～15	日高北部	7	振内、二岐、幌尻山荘、幌尻岳、七つ沼カール、戸蔭別岳、上二股、エサオマントッタベツ岳、カムエク岳、札内川。
	1980	8.19～27	日高北部	4	札内川、八ノ沢、カムエク岳、春別岳、エサオマントッタベツ岳、三股、戸蔭別岳、1967m峰、幌尻岳、奥新冠ダム。
	1980	8.19～26	日高南部	3	札内川、八ノ沢カール、カムエク岳、1832m峰、コイカク札内岳、ヤオロマップ岳、ルベツネ岳、ペテガリ岳、ペテガリ山荘。
	1986	8.23～9.1	日高北部	4	札内川、八ノ沢、カムエク岳、エサオマントッタベツ岳、新冠川二股、七つ沼カール、幌尻岳、戸蔭別岳、戸蔭別川、トッタベツヒュッテ。
知床半島	1989	7.25～29	知床横断	3	宇登呂、岩尾別温泉、羅臼平、羅臼岳、サシルイ岳、二ツ池、屏風岩、里見台、羅臼温泉。
	1989	7.30～8.7	知床岬へ	3	相泊、観音岩、知床平、知床岳、ウナキベツ川、観音岩、メガネ岩、念仏岩、カブト岩、知床岬、海岸沿いに女滝、相泊。
	1990	3.16～26	知床岬へ	2	羅臼、キキリベツ川、相泊、知床台地、知床岳、ポロモイ岳、ウィーヌプリ、知床岬、カブト岩、海岸沿いに相泊、羅臼。
剣北方稜線	1965	8.12～8.25	剣・毛勝	3	二股、池の平小屋、大窓、白ハゲ、赤ハゲ、赤谷山、ブナクラ乗越、猫又、釜谷、毛勝、毛勝谷、取り入れ口。
	1966	8.3～8.12	右股・毛勝	3	右股、槍、薬師、真砂沢、池の平小屋、大窓、赤谷山、ブナクラ乗越、猫又、釜谷、毛勝、ザックを落とす、毛勝北西尾根。
	1967	8.12～8.18	二股・毛勝	3	二股、池の平小屋、大窓、赤谷山、ブナクラ乗越、猫又山、毛勝山、毛勝谷、大明神沢出合、南又出合。
	1970	8.11～8.23	早月・北駒	3	馬場島、白萩川、大窓、白ハゲ山、赤谷山、赤谷尾根偵察、猫又、毛勝山、サンナビキ西峰、滝倉山、駒ヶ岳、僧ヶ岳、宇奈月。
	1987	8.16～8.27	早月・僧ヶ岳	4	馬場島、早月尾根、剣、三の窓、小窓、池の平山、大窓、赤谷山、ブナクラ乗越、毛勝、サンナビキ西峰、駒ヶ岳、僧ヶ岳、宇奈月。

### 矢上移転と発展

工学部の日吉復帰（矢上移転）は、藤原工業大学以来の工学部関係者の夢であった。それが1972年に実現した。部室は16-B棟2階である。小金井時代にでき上がりつつあった大学山岳部の形を完成させ、海外登山まで昇華したのが矢上時代と言えよう。一方、部員の減少によるクラブの存続の危機を迎えたのも矢上移転以降である。

季節ごとの山行計画は、年間の最終目標である春山合宿に向け、次のように定式化されていった。

- ・ゴールデンウィーク：新人歓迎山行
  - 残雪の上越の山が中心。
- ・春の早慶戦：新人訓練合宿
  - 雪上訓練を富士山、穂高岳等で実施。

・夏休み：定着合宿と縦走

-定着合宿は、北アルプスの横尾右股、千丈沢、剣沢真砂沢を3年周期。

-縦走は、リーダーの好みに応じて、北海道の日高山脈から、只見川源流、南アルプスまで日本全国。



千丈沢定着合宿 荒 1974年





穂高涸沢新人合宿 1979年6月



飛騨沢・槍平小屋付近のラッセル  
先頭千葉 1987年3月

- ・三田祭休み：初冬合宿を雪の多い後立山連峰で行う。
- ・冬休み：冬山合宿  
-アプローチが容易で各種冬山技術の訓練ができる八ヶ岳が主な山域であった。
- ・春休み：春山合宿  
-春山合宿は年間目標の山行であり、その時のリーダー陣（3年生）の好み色が濃く反映される。北アルプス笠ヶ岳から三俣蓮華、南アルプス蝙蝠尾根から赤石岳の縦走など、10日以上を雪山の中で過ごす大学山岳部ならではの登山を実践する。

これらの山行を実現するための矢上における活動として、トレーニング、勉強会、準備会、感想会が実施された。

- ・トレーニングは、基礎体力強化としてランニングを主に行った。矢上川と日吉蝮谷コース

をよく走った。山岳部の特徴は、階段の上りがあるとダッシュすることである。

- ・勉強会では、地形、衛生、気象、技術、LS/MS (Leadership/Membership) 等の登山に必要な知識を座学で教え合う。
- ・準備会では、間近に迫った山行の地形と計画の確認を行う。
- ・感想会は、山行後に皆で感想を述べ合い、次の山行に向けた反省と改善の検討。

さらに山行前には、OB と山行計画を議論し合う OB 会が開催された。学生にとっては、山行計画のための最大の関門であり、OB にとっては学生たちを無事に山行から帰ってこさせるため大切なチェックポイントであった。常に真剣勝負の場であった。OB 会では、山行の目的、目標とそれを実践するための計画の裏付け、つまりメンバー、準備状況等が問われる。それがあやふやな計画の場合は、OB 達が納得するまで何度でも開催された。逆に一回で OB 会をパスできた計画は優れており、やはり良い山行となっていた。

なお、1981年に工学部が理工学部となるに伴い、部名を工学部山岳部から理工学部山岳部と改め、略称も KEAC から KSTAC に改めた。

1981年度には全学年に複数のメンバーが揃い、夏の定着合宿では3パーティが同時に外出できるまでにメンバーが充実してきた。登山内容も冬山合宿が毎年行われるようになり、岩登りも合宿中に積極的に実施されるようになった。クラブ全体の盛り上がりを感じられるようになっていった。

### キャシードラル遠征 1983年

1982年正月に清水部長宅で恒例の新年会が開催され、大勢のOBと部員が集まった。そこで今後のKSTACの方向性が議論され、海外登山が提起された。それまでも、OBと部員の飲み会で海外登山をOBが焚きつけ、学生が盛り上がるのが何度か繰り返されてきていた。しかし、今回は単なる飲み会の盛り上げ話ではなく、クラブの現実の目標として海外登山が部員間で意識されるようになった。



左：Cathedral 頂上への登攀 宮坂、井上  
 右：頂上にて 中田 1983年8月



Cathedral 頂上にて：左から 高塚、梅村  
 中田、坂元(医学部) 1983年9月



Cathedral を目指し、Barashigri 氷河を行く

海外登山の経験があり、学生たちにクライミングの楽しさを教えてくれていた 31 期電気の齊藤が隊長となり、登山隊のメンバーが徐々に形成されていった。医療担当として医学部山岳部 5 年生の坂元がメンバーとして参加した。メンバー構成は OB 2 名(齊藤、井上)、学生 6 名(中田、宮坂、

梅村、高塚、深沢、坂元)であり、齊藤隊長以外は全員 20 歳代であった。夏休み中に登山でき、アプローチが比較的容易なヒマラヤという条件で調査し、インドヒマラヤ・バラシグリ氷河の Mt. Cathedral (6400m)が目標として選択された。登頂は 1983 年夏を目指すこととなった。そのときから毎週末のように、齊藤隊長宅にメンバーが集まり、海外登山にまつわるさまざまな課題を一つ一つ解決していった。

1983 年 7 月末に先登隊 2 名が出発し、本隊 6 名は 8 月初めにインドに向かった。インドの衝撃は大きかった。国全体がカオスという印象であった。隊長以外の 7 名には初めての氷河、初めての 4000m を越える高山であった。日本の山と異なる、剥き出しの厳しい自然の中、1 か月近い登山活動の結果、6 名が登頂に成功し、全員無事、登山計画を終えることができた。

特筆すべきは、1 年生の成長のために欠かすことのできない夏合宿が、海外登山に参加しない部員により、例年通りに、海外登山と並行して確実に実施されたことである。OB と全部員が総力を挙げて実施した Cathedral と、この年の夏合宿は、KSTAC の文化を示すひとつの頂点と言える。

### マッキンリー気象観測 1992-1994 年

1992 年から 1994 年に理工学部体育会山岳部 OB と現役部員の有志が、(社)日本山岳会科学研究班の活動に参加し、北米最高峰マッキンリー(6194 m)の頂上に気象観測装置を設置する活動に従事した。

日本山岳会は、1984 年 2 月にマッキンリーにおいて、強風のために不帰の客となった世界的な登山家植村直己氏の遭難状況を明らかにすべく、過酷な環境を有する同峰の気象観測を行うために、1990 年からマッキンリー頂上直下での、定点通年の観測プロジェクトを開始した。しかし、初期に設計製作された機器は現地の気象環境に適合できず、強風による倒壊などの問題がおきていた。こうした状況の中、日本山岳会の大森弘一郎(工学部出身：体育会山岳部 OB)より、低温、強風、





機器設置点に向けての観測機器の荷上 最後尾は高橋 第5次隊 1994年6月



第5次隊における観測機器の設営と調整：左 高橋、右 柳沢(上智大) 1994年6月

低圧という過酷な環境でも耐えうる気象観測装置の開発と設置が、理工学部山岳部とOB会に打診された。

1992年の第3次隊以降、長谷川厚志(47期計測：日本電気)が一貫して科学研究班のリーダーとなり、中村真(50期物理：京都大学大学院)、千葉信一郎(48期機械：荏原製作所)、高橋繁樹(54期物理：学部生)の4名が、日本山岳会の学生部に加盟する他大学の学生をも指導し、気象観測機器の概念設計からスタートさせ、企業の協力も得て装置の製作にあたった。特に、可搬性にすぐれ、かつ、風で倒壊しないプラットフォームの設計製作、アース、バッテリーの低温環境での作動などがポイントであった。マッキンリー頂上への観測機器への設置は、他大学山岳部員・OBと共に、第3次から第5次にわたって実施した。3次隊には、千葉および中村が、4次隊には長谷川が参加した。

特に第5次隊では、中村(当時、京都大学大学院)が、隊長として理工学部山岳部員の高橋ほか他大学山岳部員を率い、風速および風向機器の改良を実施し、さらに湿度センサーを追加した。

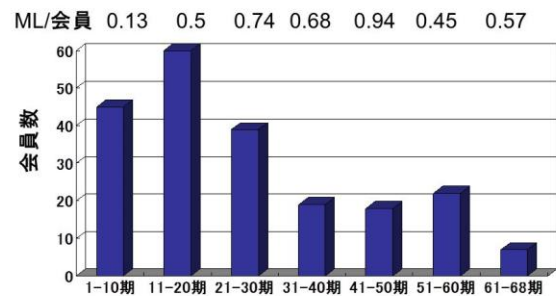
以降、第7次隊まで長谷川が中心となり、日本国内においてセンサーの改善、サポートを行った。2000年には、活動の主体を(社)日本山岳会からアラスカ大学に移管し、機器の改善、観測結果の利用が継続した。

この一連の活動が認められ、上記の4名は2009年に理工学部同窓会表彰を受けることとなった。

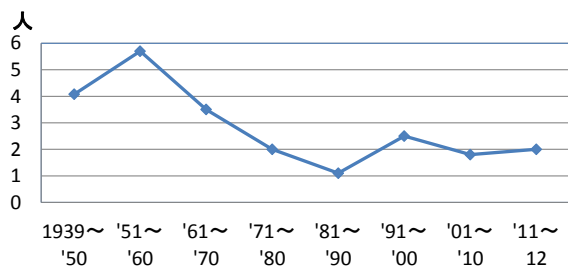
### 山岳部の現状と創生プロジェクト

山岳部の部員数は、31期以降に長期減少傾向が始まり、60期以降で加速している。これは、どの大学の山岳部においても、ここ15年ほどに共通の現象である。また、夏山志向を高めた51～60期ではメンバーの増加が見られるものの、日常の情報交換に用いられているOB会メーリングリストへの登録者数は少なく、山岳部への帰属意識は薄いと推定される。部員減少に歯止めがかかる気配は伺えない。65期で実質的に部員がゼロになった。

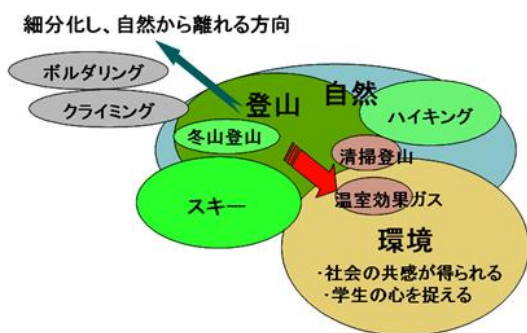
2006年に相吉英太郎(物理情報工学科教授)が部長に就任した。廃部の危機を回避すべく監督・コーチ制度を導入し、中田正文監督(40期応化)に加えて、横山雅彦(45期物理)、井坂明洋(46期応化)、関澤隆一(48期応化)をシニアコーチとして迎え、相吉部長の提案による地球環境をテーマとする山岳部創生プロジェクトが開始された。山



理工学部山岳部員(OB)の年代別人数とメーリングリスト(ML)参加者数の比較



10年ごとの平均入部人数の推移  
(OB会名簿より)



理工学部山岳部が向かうべき方向

岳部の置かれている状況は厳しい。社会全体の都市化が進み、ネットや携帯電話から離れた生活は考えられなくなっている。また、手軽にクライミングのエッセンスを体験できるボルダリングは注目されるものの、従来からの長期山行が主体の山岳部的山登りは人気がない。この二つの事象は、社会の発展方向として表裏一体をなしている。問われているのは、このような現代における山岳部の存在意義である。

理工学部山岳部の文化は、Science and Adventureに基づく次の三つである。

- Pioneer work
- 自ら目標を設定し、計画し、実行し、その経験を次の世代に伝えていくこと
- Leadership / Membership である。

これらの文化は、都市化した現代の学生の見えざるニーズに相応しい普遍的価値を持つものであり、伝えていく必要がある。また、社会もこれらを自分のものとする学生を必要としている。この文化を学生たちに伝えるためには、山岳部自体の自己変革により、活動内容を変える必要がある。

新しい機能的価値を見つけ、社会と大学に受け入れられる山岳部を創生することが重要である。

山岳部の方向性として選択した「地球環境」に対する若者と社会の関心は高い。また、山岳部の活動をただ「登山」と狭く捉えるのではなく、広く自然および山岳を相手にした活動として理解するならば、環境は山岳部の活動範囲になる。山岳部はその時代の pioneer work を求めるべき存在であり、それが環境であることは間違いない。さらに、科学技術をベースに、McKinley の気象観測装置の設計製作と設置に代表されるように、理工学部らしい発想の登山を続けてきた我々の山岳部には、環境は最適のフィールドである。

2008年度に11名の部員により、KSTACの山登りと環境活動の基礎造りが本格的に開始された。環境活動は、山岳地域の温室効果ガス計測をテーマに、独立行政法人農業環境技術研究所と同じく森林総合研究所の研究者の指導のもと、活動を行った。その成果を、2009年4月に日吉来往舎で開催のKSTACシンポジウムと、10月に京都大学で開催の日本土壌肥料学会で報告している。

指導体制も改めた。複数のOBからの指示により現役部員が困惑することのないように、前述の監督・コーチ制度を導入し、山岳部長と協議しながら、現役部員とディスカッションをする体制を作り上げた。ここに至るまでに、さまざまな試行錯誤と失敗を経験してきた。

2012年には、KSTACの趣旨に共感した、ドイツ人留学生が山岳部の活動に参加し、国際的な山岳部となった。2013年度は新人11名を迎えた。

“Science and Adventure”というビジョンの下に理工学山岳部らしく、他では試みられていない新たな分野に挑戦していくことを計画している。具



留学生部員を交えた富士登山 2012年8月





ガンマ線スペクトロメータとタブレットによる  
山岳地域での放射線計測 2013年12月

体的には、東日本大震災による福島第一原子力発電所事故のために飛散した、放射性物質の影響を受けた福島県吾妻連峰の放射線計測を行うことを目標にしている。吾妻連峰は東側に慶應山荘もあり、塾とは関係の深い山域である。

KSTACのこれらの活動は、「地図を作る仕事」に例えることができる。着実にデータを積み上げることを通して、狭い範囲では見えなかった全体像が、長期間広い範囲で俯瞰することで見えてくる。一歩ずつ小さな活動を、後輩に引き継ぎながら10年、20年と続けていくことで、価値のあるものを作り上げていくことがKSTACの方向性と考えている。さらには、この活動をKSTACを中心に他の山岳部や山のクラブに広げることで、pioneer workが見えなくなってきている登山界全体の現状を打破することにつなげたい。

### 明日の山岳部を目指して

創部以来75年を経過し、社会情勢や大学自身も大きく変貌した。その間、慢性的な部員不足から部の存続の危機を迎えた時期もあった。しかしその都度、現役部員自身とOB会の努力により復活を遂げて現在に至っている。これからも山岳部は先輩たちから連綿として受け継がれてきた、Pioneer workという精神とLeadership、Membershipという文化を伝え続けていきたい。

山という自然に対する合理的な理解と畏敬の



慶應吾妻山荘

念、自分たちで考える力、LeadershipとMembership、そして、困難に立ち向かう精神力は山の中だけで役立つのではない。これを感じさせる人は、都会にあっても魅力的な人であろう。LeadershipとMembershipという考えは、今日注目されているCommunitarianismを先取りしてきたかもしれない。

東日本大震災以降、世の中も変わり始めた。人に任せるのではなく、困難には自分の智恵でぶつかって行こうとする考えが、定着し始めているようだ。堅実な生き方をする学生がキャンパスに戻って来ている。新しい山岳部を作ってゆきたい。

2013年10月に、新たに神原陽一准教授(物理情報工学科)を部長に迎えた。

#### 付録1 歴代部長

金原 三郎	1939.12.~1940.3.
酒井 将	1940.4.~1949.3.
鈴木 登紀男	1949.4.~1962.9.
小茂鳥 和生	1962.10.~1981.8.
清水 真佐男	1981.9.~2003.3.
鈴木 哲也	2003.4.~2006.3.
相吉 英太郎	2006.4.~2013.9.
神原 陽一	2013.10.~

#### 付録2 部報

嘯雲1号	1942年	11月29日
嘯雲2号	1957年	6月30日
嘯雲3号	1963年	2月20日
嘯雲4号	1982年	1月30日
嘯雲5号	1987年	5月30日
嘯雲6号	1993年	7月17日
Cathedral 遠征報告	1984年	7月26日